

山口 寿（やまぐち・ひさし）

1、プロフィール

飯田蛇笏との出逢いによって俳句に目を開かれる。蛇笏主宰の俳誌「雲母」に拠って、風格と抒情性の漂う作品を発表した。

<生没>

1903(明治 36)年7月 16 日 ~ 1996(平成 8)年9月7日

<代表作>

句集『四季』『山口寿百句集』

随想集『山恋』

<青森との関わり>

弘前市生まれ。弘前高校教諭、県教育委員会社会教育課長、市立弘前図書館長、東北女子短期大学教授を歴任。

2、作家解説

明治 36 年青森県弘前市に生まれ、鱒ヶ沢町の祖父のもとで育つ。旧制弘前中学・弘前高校を卒業し、東京大学文学部に入学。同期に清水幾太郎がいた。

昭和 15 年春、山梨県社会課長として東八代郡境川村での集会に出かけた時、飯田蛇笏と出会う。その日蛇笏からもらった『靈芝』の中の「卵とる人影かこつ秋の鶏」で俳句への眼が開かれた。

昭和 17 年マライ半島従軍。21 年の俘虜生活の時、キャンプで句会をつくる。23 年から新制弘前高校教諭。その暮れから、蛇笏主宰の俳誌「雲母」に投句し、教えを乞うことになる。その頃の「除夜の鐘きくべく聖クララ伝を閉づ」が蛇笏に激賞され『現代俳句の批評と鑑賞』に収められた。25 年春『雲母』の<新人紹介>では 10 句が特選された。

市立弘前図書館長時代の 34 年春、「雲母」同人に推薦され、同年『山口寿百句集』を刊行するが、やがて句作に挫折。「『五・七・五』の強迫」を振り切るべく本

格的に登山を始め、句作も自然の感興にまかせるようになる。45年4月に随想集『山恋』を、56年8月には30年余の全作品から350句を精選した句集『四季』を刊行する。

59年3月、東北女子短大名誉教授第一号となる。平成8年9月永眠。

3、資料紹介

○句集『四季』

図書

1981(昭和56)年8月

194mm×135mm

昭和21年のマライ半島捕虜時代から52年まで、約30年にわたる700余句の中から、飯田蛇笏・龍太の選句を中心に350句を収録している。巻末の「わが師、山廬 飯田蛇笏・龍太両先生のこと」は、山口寿の作句生活を伝える興味深い文章となっている。